

「さ寝(を) さ寝…」から「眠(を) 寝…」へ

——上代語の同族目的語構文——

佐佐木隆

一

上代日本語の同族目的語構文は、実際にどのような状況で用いられたのか。その具体的な様相について、本稿の筆者は二つの前稿でやや詳細に考察を加えた。⁽¹⁾前二稿のなかでは、多くの研究者が検討の対象としてきた数種の同族目的語構文の例に、筆者の調査によって新たに得られた数種の例を追加し、上代の人々が同構文を用いた背景・意図その他に関して、いくつか私見を述べた。

従来の研究者が扱ってきた同族目的語構文のおもな例は、「心(を) 思ふ」「音(を) 泣く／音(を) 鳴く」「眠(を) 寝」の三種である。これらのほかに、あえて名づけるとすれば「同族主語構文」とでもすべき「命生く」「命死ぬ」などの表現も、三種とは特に区別することなく扱われることが多かった。

本稿では、「寝」「思ふ」の二つの動詞が作る同族目的語構文を取り上げ、それらの語構成に関する時代的な変化について考察する。前二稿では、その点を不十分にしか分析することができなかったからである。

⁽¹⁾「さ寝(を) さ寝…」から「眠(を) 寝…」へ (佐佐木)

「さ寝(を) さ寝…」から「眠(を) 寝…」へ(佐佐木)

七四

初めに取り上げるのは、「眠(を) 寝」およびそれに準じる表現である。

- 1 笹葉に 打つや霰あられの たしだしに 韋泥弓牟ひねてむのちは 人は離かゆとも
(記七九)
- 2 愛うはしと 佐泥斯佐泥弓婆さねしさねてば 荇薦かりこもの 乱みだれば乱れ 佐泥斯佐泥弓婆さねしさねてば
(記八〇)

この二首の歌謡は、『古事記』の説話のなかに並んで出ている。二首の直前の記述には、「木梨きはじ之輕太子かろのみこが同母妹である輕大郎女かろのおいづめと関係をもった際に詠んだ歌だ」という意味の説明が見える。どちらも、「自分が輕大郎女と確かに共寝しさえすれば、あとはどうなってもかまわない」という輕太子の心情を述べたものである。1の第五句の「人は離ゆとも」と2の第四句の「乱れば乱れ」は、輕太子のすてばちな気持ちを直截に表明した句である。

二首の前には十句から成る長歌も掲げられており、その末尾には、二人が共寝したことを堂々と宣言する、「昨夜こそは安く肌触れ」という表現が置かれている。心密かに願っていたことがようやく実現し、「昨夜こそは、ゆつたりと(輕大郎女の)肌に触れた」というのである。

1の第四句に含まれる「率寝ひねてむ」の「率寝ひね」は、同族目的語構文に属する「眠い(を) 寝ぬ」とは、言うまでもなく異種の表現である。「伴う」の意を表す「率ひる」と「寝」とが接続した動詞であり、「連れて行って寝る」の意、つまり「共寝する」の意を表す。

2の「さ寝しさ寝てば」では、単なる「寝」ではなくて、接頭辞を伴った「さ寝」が用いられている。『古事記』の「さ寝(佐泥) むとは…」(記二七)や『萬葉集』の「さ寝(佐祢) し夜の…」(五・八〇四)をはじめとして、「さ寝」は上代の文献に三十余例ある。

2の「さ寝しさ寝てば」には、「さ寝」が二つ含まれている。それらのうち、第一の「さ寝」の品詞については、二つの説が注釈に見える。一つは、「上のサネは体言になつてゐる」「ネは寝(下二)の連用形(名詞形)で…」「上のサネは體言の格」などのように、連用形が名詞に転成したものだと思ふ説である。このように理解する時は、第一の「さ寝」は目的語として用いられたものであることになるから、「さ寝しさ寝てば」は同族目的語構文の例である。二つの「さ寝」の間に「し」という助詞が置かれてゐるが、後出の諸例を見ればわかるように、同構文には「し」が含まれることが多い。

第一の「さ寝」に関するもう一つの説は、「ネは「寝」の連用形」だと見るものだが、このように動詞だと明言している注釈はとんどない。それは、第一の「さ寝」は名詞・動詞のどちらなのかについて、注釈を担当した研究者の多くが関心をいだいていなかったからだろう。

2の「さ寝しさ寝てば」が動詞としての「さ寝」を反復したものだと思ふれば、それは、たとえば「吾は子を生み生みて(生生子而)、生みの終に三はしらの貴き子を得つ」「(神代記)や、「行き行けど(雖行住)安くもあらず…」「(十六・三八五七)の「生み生みて」「行き行けど」のように、動作の反復あるいは継続を表していることになる。つまり、「さ寝しさ寝てば」の場合は、「さ寝」を何日かくり返したことを表すことになるのだが、それで問題はないのか。さきに言及したように、1・2の前に掲げられた長歌は、「昨夜こそは安く肌触れ」という表現でしめくくられている。事を一夜に限定した「昨夜こそは」という句を「安く肌触れ」が承けているから、二人が何日も重ねて共寝をしたと想定すれば、それは、歌の表現に逆行することになる。ここの表現が「昨夜も」となっているわけではないし、何日か共寝を重ねたその最後の夜が「昨夜」だったと想定するにしても、その想定には大きい無理がある。しかも、「さ寝しさ寝てば」のように動詞を反復した表現に「し」が含まれた例は、上代語には見えない。やはり、この表現

「さ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ(佐佐木)

七六

は動作の反復・継続を表すものだと考えることはできない。

このように、動詞を反復した形式の用法からも、歌の表現の内容からも、2の第一の「さ寝」は動詞ではなく名詞であり、従って「さ寝しさ寝てば」は同族目的語構文の例だ、と見るのが自然である。現に、「さ寝(佐祢)に吾は行く」〔十四・三三六六〕のように、『萬葉集』には「さ寝」という連用形名詞の例があり、この種の「さ寝」は辞書の類に名詞として立項されている。

一方、第二の「さ寝」を含む2の「さ寝てば」が、動詞「さ寝」と助動詞「つ」の未然形とが構成する仮定表現であることは明瞭であり、特に説明を要しない。仮定表現の「…てば」には、「手をし取りてば(取而者)花は散るとも」〔七・一二五九〕や「君とし見てば(見氏婆 吾恋ひめやも)〔十七・三九七〇〕」などをはじめ、多数の例がある。やはり、2の「さ寝しさ寝てば」は同族目的語構文の例だと見るべきである。

この2の「さ寝しさ寝てば」によく似た句が、ほかにある。『萬葉集』の東歌に見える「さ寝をさ寝てば」という句がそれであり、助詞の「し」が「を」となっただけの違いである。

3 伊香保ろの 夜左可の堰塞に 立つ虹の 頭ほろまでも 佐祢乎佐祢弓婆

〔十四・三四一四〕

この歌の第三句、第五句は、「虹が立つように、二人の仲が周囲に知られるほど共寝ができた(あとはどうなってもよい)」の意である。注釈では、第五句の「さ寝をさ寝てば」について、2の「さ寝しさ寝てば」に同じだとか、「サ寝ヲサ寝は、眠ヲ寝に同じ」だとかと解説している。どちらも妥当な解説だから、第五句は同族目的語構文の例

であり、それは、2の「さ寝しさ寝てば」と同様に仮定表現だということになる。同構文に「を」が含まれるもの、きわめて普通のことである。

二

2・3の当該句と同様に「さ寝」を反復した類似句は、ほかにもう一例ある。それは、3と同じく東歌に見えるものである。

4 川上の 根白高萱 ねしろたかがや あやにあやに 左宿佐寐弓許曾 さねさねてこそ 言に出にしか

〔十四・三四九七〕

第一句・第二句が第三句を導入する序になっており、第二句の末尾にある「萱」が類音の「あや」を呼び起こす、という関係である。言うまでもないが、「あやに」は「むやみに」「ひどく」などの意を表す語である。

第五句が「言に出にしか」となっているので、第四句の「さ寝さ寝てこそ」が既定・過去の事態を表現したものであることは明瞭である。その「さ寝さ寝てこそ」の場合は、間に「し」「を」などの助詞が置かれることなく、二つの「さ寝」が直接に重なっている。第二の「さ寝」が動詞として機能していることは、それに接続助詞の「て」が下接している点から見て確実である。

第二の「さ寝」と同様に、第一の「さ寝」もまた動詞として機能しているのであれば、第四句は「さ寝」という行為を何日か重ねたこと、つまり動作の反復を表すことになる。注釈でもそのような意味の解説を加えている。「共寝

「さ寝（を）さ寝…」から「眠（を）寝…」へ（佐佐木）

する日をむやみに重ねたからこそ、その間に二人の仲が周囲に知られ、噂が立ってしまった」という状況である。

これに対して、第一の「さ寝」が連用形名詞であれば、第四句は「さ寝(を)さ寝てこそ」の意の、同族目的語構文に属する表現となる。一方で、「眠もさ寝てしか(伊毛左衿而師加)」「八・一五二〇」という、動詞の「さ寝」を用いた表現の例が実際にある。果たして、4の「さ寝さ寝てこそ」は、「さ寝(を)さ寝てこそ」の意を表す同族目的語構文の一例なのか、あるいは、「さ寝」という行為を何日か重ねたことをいう表現なのか。

4の「さ寝さ寝てこそ」には、2の「さ寝しさ寝てば」や3の「さ寝をさ寝てば」とは異なって、「し」「を」などの助詞が含まれていない。これは、同じ動詞をそのままくり返して動作の反復・継続を表す上代の構文に一致する(既述)。また、「言に出にしか」という事態が生じた原因として、「さ寝さ寝てこそ」という行為が提示されているのは、「さ寝さ寝てこそ」が動詞の「さ寝」を反復したものである可能性が高いこと、逆にこれが同族目的語構文の例である可能性が低いことを示す、と言える。

2の「さ寝しさ寝てば」と3の「さ寝をさ寝てば」は、さきに検討したように同族目的語構文の例だと見るべきものである。しかし、実を言えば、そのように理解する場合には、一つの根本的な疑問に解答を与える必要がある。これらの例が、同構文の表現として一般的な「眠(を)寝」の形式に従わずに、「さ寝」に「さ寝」を重ねる形式になったのはなぜなのか、という疑問である。この疑問に対する解答として提示しうるのは、次のような想定である。

連用形から転成した名詞の「さ寝」と、本来の名詞である「眠」とは、文法面・構文面で対等であり機能的に等価である。それゆえに、「さ寝」と「眠」とが互換性をもつことがあり、同族目的語構文の場合にはどちらを用いることも可能だった。

ただし、同族目的語構文であればどのような場合でも「さ寝」と「眠」とは対等・等価だった、というのではない。

具体的に言えば、同構文に用いられる両語の間には、連用形名詞から本来の名詞へ、という時代的な変化のあったことが想定されるのである【「さ寝をさ寝」に含まれる第二の「さ寝」と、「眠を寝」の「寝」のあとに、どのような表現が続くかということは、ここでは問う必要がない。よって、次では「寝」に続く表現を「…」で示す】。

さ寝をさ寝… ↓ 眠を寝…

このような時代的な変化があったことを想定させるのは、『古事記』の歌謡と『萬葉集』の東歌とにかかわる次の三つの事実である。

I 「さ寝」を重ねて用いた句は、既出の『古事記』の歌謡と東歌にしか例が見えない。

II 「さ寝」を名詞として用いたものには、東歌に二例があるのみで、それ以外の歌には例が見えない。

III 『萬葉集』でごく一般的な、「眠(を)寝」という語構成をもつ同族目的語構文の例は、東歌には見えない。

これらの事実から推定されるのは、同族目的語構文の目的語として「さ寝」を用いる、より古い時代の言いまわしが、『古事記』の歌謡と東歌とに反映しているのではないか、ということである。つまり、同族目的語構文の目的語として、本来の名詞である「眠」を用いる表現は、連用形名詞の「さ寝」を用いる表現より遅れて成立したものである、ということである。そうだからこそ、「眠(を)寝」が成立していなかった古い時期には、連用形の「さ寝」が名詞に転成した「さ寝」を同族目的語構文の目的語として用いたのだろう。あるいは、古い時期の同族目的語構文で

「さ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ(佐佐木)

は、それを構成する動詞と目的語との双方に同源の「さ寝」を用いて、「さ寝しさ寝／さ寝をさ寝」とするのが原則だった、という可能性もある。

『古事記』の歌謡には、「寝」の敬語である「寝す」を用いた、「眠は寝さむを(伊波那佐牟遠) …」(記三)や「眠をし寝せ(伊遠斯那世)」(記五)などの、同族目的語構文の例がある。その点は、「安眠し寝さぬ(夜周伊斯奈佐農)」(五・八〇二)や多数の「眠(を)寝」の例がある『萬葉集』の歌と同様である。同構文の目的語として「眠」を用いることも、中央では既に一般的に行われるようになっていたのだろう。

しかし、東歌では、同族目的語構文の目的語に「さ寝」を用いる古い言いまわしが既に定着していて、目的語に「眠」を用いる段階には最後まで至らなかった、と推定される。「眠(を)寝」の例が東歌にないのは、そのためだろう。同構文に属する表現が、3の第五句のように「さ寝をさ寝…」となったのは、歌を詠んだ人物の個性や好みに基づくことではなく、同構文に「眠」を用いる段階にまで至らなかった東歌としては、必然的なことだったのであるか。

東歌には、多数の「寝」の例があるが、「眠寝」に由来する「い寝」の例は一つもない。しかし、周知のように、東歌以外の『萬葉集』の歌には「い寝」の例は数多く用いられている。中央の歌と大きく異なっていて、とにかく東国では「い寝」は用いなかったらしい。そうであれば、同族目的語構文の「眠(を)寝」の例が東歌に見えない(右の三項のⅢ)のも、しごく当然のことである。

続いて、「思ふ」を用いた同族目的語構文の例について考察する。「心(を)思ふ」にも、「寝」を用いた同族目的語構文と並行するような時代的な変化が、果たして想定されるかどうか。

- 5 吾が恋は 夜昼別かず 百重成 情之念者 いたも為便無し
〔十二・二九〇二〕
- 6 愛しと 於毛比之於毛波婆 下紐に 結び付け持ちて 止まず思はせ
〔十五・三七六六〕

二首ともに『萬葉集』に見えるものである。5の第四句の「心し思へば」は、6の第二句の「思ひし思はば」とよく似た句である。しかし、5には名詞の「心」と動詞已然形の「思へ」とが用いられているのに対し、6には名詞・動詞の識別が困難な「思ひ」と、動詞未然形の「思は」とが用いられている、という相違がある。

5の「心し思へば」は、同族目的語構文に属する「心(し)を」思ふ」の、疑う余地のない一例であるかのように思われる。また、一方では、「夜昼別かず百重成」の二句が「絶えず頻りに」の意を表すものなので、この「思へば」は反復・継続を表しているのではないか、とも思われる。ただし、そう理解してしまうことにも問題がある。「夜昼別かず百重成」という表現を承けていて「思ひし思へば」は反復・継続を表していることに見ることに、かなり不安が残るのである。ここでは、判断をひとまず保留して、6の表現を細かく見てみる。

よく似た6の「思ひし思はば」も同族目的語構文の一例なのかどうか、判断が難しい。「思ひ」が連用形名詞ならば、さきに見た2の「さ寝しさ寝てば」と同じく、同構文の一例となる。しかし、注釈では、「し」を挟んで動詞の「思ひ」を重ねたものだとか、「思ヒ思フ」は思い続ける意」だとかと解説している。「しきりに思うのならば」「心から思ってくれるのなら」といった意味の、動詞を反復した強調表現だというのである。中古の歌には同種の強調表

「さ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ(佐佐木)

現が少なからず見えること(後述)を意識したうえで判断だろう。しかし、そのような見解は必ずしも妥当なものではない。

さきに見たように、2の「さ寝しさ寝てば」について、ほとんどの注釈が同族目的語構文の例だと認めている。本稿でも表現内容・構文のありかたに細かく検討を加えたとおり、同構文に属する表現だと見るしかない。

2の例には「愛^{うは}しと」という第一句が先行し、第一句・第二句は「愛しとさ寝しさ寝てば」という仮定条件句を構成している。これと同様に、6の「思ひし思はば」にも「愛しと」の句が先行し、その第一句・第二句は、2と同様に「愛しと思ひし思はば」という仮定条件句を構成している。

2 愛しと さ寝しさ寝てば…

6 愛しと 思ひし思はば…

ともに二つの句から成り、動詞が異なるほぼ同じ構成をもつ表現について、一方を同族目的語構文の例だと認め、他方をその例だと認めない、という明確な根拠は一つも見出すことができない。2の「さ寝しさ寝てば」が、動詞の「さ寝」を反復した強調表現でないとすれば、6の「思ひし思はば」もまた同種の強調表現ではなく、同族目的語構文の例だ、と理解するのが自然である。

一般に、「心(を) 思ふ」という同族目的語構文の前には、その「心」あるいは「思ふ」の内容を具体的に説明する修飾成分が置かれる、というのが基本である。その点に「心を思ふ」という表現を用いる一つの理由があった、というように前稿で述べた。たとえば、「浮心吾不念国」〔四・七一〕や「如今心乎常尔念有者…」〔八・一

六五三」に見える「浮きたる」「今の如」が、そうした機能をもつ連体修飾成分・連用修飾成分である。これらに対応するように、5には連体修飾成分の「百重なす」があり、6には連用修飾成分の「愛しと」がある。この点で、さきに判断を保留しておいた5の「心し思へば」も同族目的語構文の例である可能性が高い。

6の「思ひし思はば」の「思ひ」には、5の「心し思へば」の「心」が対応しているから、「思ひ」と「心」とは構文面で等価な目的語だと考えてよいだろう。さきに、2の表現を分析し、「さ寝をさ寝…」から「眠を寝…」へとこの時代的な変化を想定したのと並行的に、6の「思ひ」と5の「心」との間にも、

思[。]ひし思… ↓ 心し思…

という時代的な変化があった可能性が考えられる。こうした変化から推定されるのは、さきにも述べたように、同族目的語構文を構成する動詞と目的語とは古くは同源の語を用いるのが原則だったろう、ということである。

このことから、6の「思ひし思はば」は古い時代の同族目的語構文を反映する例だろう、と推定される。次の二首に見える「思ひし思へば」「思ひし思はば」についても、同様のことが言えるように思われる。

7 夢のわだ 言^{こと}にしありけり 現^{うつ}にも 見て来るものを 念^{おも}四^{むし}念^{おも}者^{へば} (七・一一三二)

8 鵜^う川^{かは}立ち 取^とらさむ鮎^{あゆ}の しが鱒^{はた}は 吾^おにかき向け 念^{おも}之^{むし}念^{おも}婆^{はば} (十九・四一九二)

しかし、これらの二首の場合、表現の内容をよくよく吟味してみると、そのように理解するのはいささか早計のよ

「さ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ(佐佐木)

うである。

右でも述べたように、「心(を)思ふ」という同族目的語構文の場合には、その「心」あるいは「思ふ」の内容を具体的に説明する修飾成分を直前に置く、というのが基本である。しかし、7・8の二首の構成は、それとは大きく異なっている。どちらも第四句で表現が切れていて、第五句には修飾成分が付されていない。また、7の「思ひし思へば」と8の「思ひし思はば」は動詞の「思ふ」を反復した強調表現だ、と一般に理解されている。それが正しい理解だろう。

7の文脈は「夢のわだを現実に見ることができた、頻りに思っていたのだから」ということであり、8のそれは「せめて鮎の鱗を欠き取って私に届けてほしい、私のことをつねづね思ってくれているなら」ということである。どちらにも「し」が含まれており、それは同族目的語構文によく見られることではあるが、歌の構成と文脈の二点から見て、ともに同族目的語構文の例だとは考えにくい。だとすれば、両者はどのような表現だと理解すべきなのか。

二首の「思ひし思へば」「思ひし思はば」という表現は、語構成のうえではやはり古いものだと考えられる。しかし、これらの表現は、新しい「心し思へば」「心し思はば」と同様にもともとは同族目的語構文として用いられたのだ、ということが人々に忘れられてのちに、同じ動詞をくり返した単なる強調表現だという理解に基づいて用いられたものではないか。

中古になれば、『古今和歌集』を初めとする歌集に、さまざまな助詞を介して同じ動詞を重ねた強調表現が少なからず見えるようになる(既述)。なかには、8の「思ひし思はば」と同様に「し」を間に置いた、「植ゑし植ゑば」「恋をし恋ひば」(後出)のような表現もある。7・8の表現は、そうした先駆的な強調表現の例だと見られるのである【同じ動詞を重ねた中古の強調表現については、次節で簡単に述べる】。

いずれにしても、7・8の「思ひし思へば」「思ひし思はば」という表現を、同族目的語構文の「心を思ふ」に相当する表現だと単純に理解することには、複数の問題がある。

四

右で述べたことで既に明らかのように、「さ寝」^な「思ふ」を用いて同族目的語構文を作る場合、その目的語を提示するには二つの方法があった。一つは、「さ寝」「思ふ」の連用形名詞である「さ寝」「思ひ」を、そのまま目的語に仕立てるものである。もう一つの方法は、連用形名詞に近い意味を表す本来の名詞を探し出し、それを目的語とするものである。

どちらかと言えば、連用形名詞を選ぶ方が、単純で容易であるだけでなく確実でもある。これとは逆に、動詞にきわめて近い意味を表す本来の名詞を選ぶ方は、確実性に欠ける。適切な本来の名詞が存在しないことも、実際にはありうるからである。⁽³⁾

前稿では、同族目的語構文の一例として、『萬葉集』の「八尺の嘆き(を)嘆けども(八尺乃嘆嘆友) …」(十三・三三四四) という表現をあげた。これと「吾が嘆く八尺の嘆き(吾嗟八尺之嗟) …」(十三・三三七六) とは、互いに、

嘆き(を)嘆く——嘆く嘆き

「さ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ(佐佐木)

「さ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ(佐佐木)

八六

という言い換えが可能な関係にある。これとまったく同じ関係が、次の各組にも認められる。

心(を)思ふ——思ふ心
音(を)泣く——泣く音
言(を)云ふ——云ふ言

このような言い換えが可能なのは、同族目的語構文の例がもつ顕著な特徴である。したがって、「嘆き(を)嘆く」が同構文の一例だということは明らかなのだが、「嘆き(を)嘆く」の場合に、連用形名詞の「嘆き」に近い意味をもつ本来の名詞があれば、上代の人々はそれを用いた可能性がある。しかし、上代語の資料を博搜しても、「嘆き」に近い意味を表し、かつ文脈に適合する本来の名詞は見あたらぬ。目的語として連用形名詞を用いるしかなかったのである。宣命に見える「使ひ(を)遣はず」「五六詔」の「使ひ」についても、同じような事情がある。

連用形名詞に近い意味を表す本来の名詞があれば、それを目的語とすることによって、表現の平板化を避けることができる。特に、2の「さ寝しさ寝てば」の場合、本来の名詞である「眠」を用いれば、第二の「さ寝」が単に横になる意ではなくて睡眠をとる意だ、と意味を限定して表現することも可能である。それらのことが、「さ寝」から「眠」へと入れ替えられた大きな理由だろう。「眠もさ寝てしか(伊毛左祢而師加)」「八・一五二〇、一二云」は、そのような意図・目的に沿った表現の例である。

6の「思ひし思はば」の場合には、この表現に特有の事情があって、それが「思ひ」から「心」への入れ替えを促進したのだろうと推定される。特有の事情とは、「思ひ」にきわめて近い意味を表す名詞の「心」が存在した、とい

うことでだけはない。「思ひ」「心」のどちらを用いてもよく似た意味を表すという言いまわしが、当時はほかに少なからず存在したことである。たとえば、次のような言いまわしである【最後にあげる「下心」は現代語のそれとは意味が異なり、「隠している恋心」の意の「下思ひ」にきわめて近い意を表す】。

思ひ乱る —— 心乱る

思ひ苦し —— 心苦し

思ひ惑ふ —— 心惑ふ

下思ひ —— 下心

思ひ妻 —— 心妻

この種の実例を、『萬葉集』から具体的にあげておく。

「念乱而…」〔十一・二三五四〕 —— 「心乱…」〔九・一八〇五〕

「思遣たづきを知らに…」〔一・五〕 —— 「許己呂也良武と…」〔十七・三九九一〕

「於毛比具流之母」〔十四・三四八二〕 —— 「情苦喪」〔九・一八〇六〕

「思暢見和ぎし山に…」〔十九・四一七七〕 —— 「意將述と…」〔十・一八八二〕

「思或而」〔十三・三三四四〕 —— 「心遮」〔四・六三三〕

「念息而」〔六・九二八〕 —— 「心安目六」〔十二・二九〇八〕

「ひ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ(佐佐木)

「さ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ(佐佐木)

八八

「吾^{わが}之^た下^お念^もを」〔十九・四二一八〕——「吾^{わが}下^た心^{こころ}」〔七・一三〇四〕

「吾^{わが}が念^{おも}妻^{むすめ}は」〔十一・二七六一〕——「吾^{わが}が情^{こころ}都^{しよ}末^ら」〔八・一六一一〕。

右にあげた実例には、二種の動詞の接続、目的語と他動詞との接続、名詞と形容詞との接続、主語と述語との接続、名詞と名詞との接続その他、さまざまな構文的関係・意味的關係にあるものが含まれている。しかし、各組における上の「思ひ」と下の「心」とは互いに類似する文脈・表現に現れている。粗雑な言いかたにはなるが、このような各組の「思ひ」と「心」との間には互換性があったと見てよい。そのような状況が、たとえば6の「思ひし思はば」の「思ひ」を「心」へと入れ替える際の一つの契機になっただろう、と考えられる。

ところで、「言^{こと}のみを堅^{かた}く云^いひつつ(言^{こと}耳^{みみ}乎^や堅^{かた}要^い管^{かん})」〔十二・三二一一三〕は、「言^{こと}を云^いふ」と単純化することができる表現であり、名詞の「言」と動詞の「云ふ」とがきわめて近い意味を表すという点で、これを同族目的語構文の一例だと見ることができ。ただし、これによく似た、次の歌の第三句には、以上で述べたことに関連して、処理のなかなか困難な問題がある。そのことについて、簡単に言及しておく⁽⁴⁾。

9 ま玉つく をちこち兼ねて 言^{こと}齒^は五十^い戸^へ常^{とこ} 逢^あひて後^{のち}こそ 悔^くいにはありといへ

〔四・六七四〕

第三句の「言^{こと}齒^は五十^い戸^へ常^{とこ}」は、写本では「いひは…」⁽⁵⁾「イヒハ…」と訓じられているが、現行の注釈の多くに「言^{こと}は…」が採用されている。「いひは…」は中古の写本にも見えているので、当時はそれが違和感を与えない表現だっ

たか、あるいはそれが違和感のより少ない表現だったか、のどちらかだったろうと推察される。現行の注釈に「言は…」が採用されているのは、『萬葉集』に「言を云ふ」の例はあっても「云ひは云ふ」の例はない、という事実に基づくものだろう。

「言は云ふ」だけでなく、「云ひは云ふ」もまた同族目的語構文の例だと言えることができる。それは、同構文の「さ寝」から「眠」へ、また「思ひ」から「心」へ、という時代的な変化が目的語に起こったことを考慮すれば、連用形名詞の「云ひ」から本来の名詞である「言」へ、という変化が想定できるからである。

しかし、9の「言[。]齒…」という本文を「云ひは…」「言は…」のどちらかに訓ずべきか、という具体的な問題については決定的なことが言えない。「云ひ」という連用形名詞の確かな例が上代語の資料に見えないのに対し、「言を云ふ」という表現ならほかにも『萬葉集』に例がある、という事実を重視し、現行の注釈のように「言は…」と訓じておく、というのが妥当な措置だろう。

五

次の二首は、『古今和歌集』に見えるものである。

- 10 植ゑし植ゑば 秋無き時や 咲かざらん 花こそ散らめ 根さへ枯れめや [五・二六八]
11 種しあれば 岩にも松は 生ひにけり 恋をし恋ひば 会はざらめやは [十一・五二二]

「さ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ(佐佐木)

「さ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ(佐佐木)

九〇

10の第一句の「植ゑし植ゑば」と同じ句は、『後撰和歌集』にもある。また、11の歌の「恋をし恋ひば」と同じ句も、同歌集に見える。

前者の「植ゑし植ゑば」は歌の初頭に置かれた句であり、強調のために同じ動詞を反復したものである。「心を籠めてしっかり植えておいたならば」の意である。後者の「恋をし恋ひば」は、句中に「を」を含む点で、3の「さ寝をさ寝てば」と同じく同族目的語構文の一例であるように見えるが、実はそうではない。「一途に恋い慕っていれば」の意の強調表現だというのが一般的な理解であり、それが文脈から見て妥当な解釈である。どちらの表現も、同族目的語構文の例としては解釈できないものである。

これらに類する動詞の反復表現は、『古今和歌集』だけでも「会ひに会ひて」「吹きと吹きぬる」「しぐれしぐれて」「かへるがへるも」その他、数多く用いられている。中古の歌では、具体的な構文はそれぞれ異なってはいても、また句中に助詞が含まれているか含まれていないかに関係なく、とにかく同語を反復した強調表現が特に好まれたのである。⁽⁵⁾

注

- (1) 小著『上代日本語構文史論考』(二〇一六年、おうふう)の第1部第一章。また、小論「上代語の同族目的語構文を再考する」(二〇一九年、学習院大学文学部『研究年報』63輯)。
- (2) ただし、『萬葉集』巻第二十には「望陀郡上丁玉作部国忍」の詠んだ歌があり、その第三句には「寝ぬれども(伊努礼等母)」(二一・四三五二)とある。中央の言いまわしを模倣したものかも知れない。
- (3) 「さ寝(を)さ寝…」から「眠(を)寝…」へ、また「思ひ(し)思…」から「心(し)し思…」へ、という時代的な変化からは、「泣く／鳴く」についても、

泣き(を)泣…／鳴き(を)鳴…↓音(を)泣…／音(を)鳴…
という並行的な変化が推定できる。

しかし、動詞の「泣く／鳴く」と同源の目的語である「泣き／鳴き」を、同族目的語構文の目的語として用いた例が一つもない。それだけでなく、単独の「泣き／鳴き」を名詞として用いた例も僅少である。これらの現象が何に由来するのか、不明である。

動物に用いる「鳴く」はともかくとして、人に用いる「泣く」には、声を出して「泣く」という場合と、涙を流すだけで「泣く」あるいは心の中で「泣く」という場合とがある。かりに「泣き(を)泣く」という同族目的語構文が可能であり、実際にそれを用いたとしても、その表現では、人知れず「泣く」というのか、声を出して「泣く」というのか、わからない。そこで、声を出して「泣く」場合を、当初から「音(を)泣く」と表現したのではないか。

また、ある思いを人知れず心にいだく場合、「下思^{した}ひ」「下焦^こがれ」「下恋^こひ」「下延^ばへ」などの表現を用いることが上代に行われたが、そのなかに「下泣きに泣く(斯多那岐爾那久)」「記八三」という例も含まれている。このことから、次のような事情も考えられなくはない。つまり、声を出して「泣く」のか、心の中で「泣く」のか、という違いを表現し分けることが不可能な「泣き(を)泣く」を用いることを避けて、当初から、声を伴う場合は「音(を)泣く」を用い、そうでない場合は「下泣きに泣く」を用いた、ということである。「下+泣き」と同様の語構成をもつ複合語は、『古事記』『日本書紀』『萬葉集』を併せて延べ十例ほど見えており、古くから用いられた結合形式だったことが明らかである。

(4) このことについては、注(1)にあげた小論「上代語の同族目的語構文を再考する」のなかで私見を述べた。

(5) このことについては、注(1)にあげた小論のなかで私見を述べた。

(日本語日本文学科 名誉教授)